禅と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XXIII

臨済禅と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思います。

高野佐三郎2

「昭和の剣聖」とも称される高野佐三郎の、その道の大成に貢献したといえる鉄舟は、どう高野と交わったのでしょう。

高野との試合に臨んだ岡田は、その不遜な態度に怒りを覚えました。

佐三郎は通常の試合と同様、竹刀で三四本打ち込みますが、岡田は決して「参った」とはいわず、それどころか、先を特に削って鋭くした竹刀で、胴から喉笛まで裂くように突き上げられ、喉にひどい傷を負って、白袴が血に染まってしまいました。高野も必死で抵抗して打ち込みますが岡田はかまわず突き上げてきます。周囲の宥めもあって引き分けでこの試合は終わりましたが、高野は敗北感と屈辱感にまみれたのでした。

その日の内に雪辱を果たすまで帰らぬと書き置きを残し、出奔し東京に向かった高野は、旧知の道場を訪ね、東京で荒い猛烈な道場を教えてほしいと聞くと、「山岡さんです」という返事でした。

この時鉄舟は44歳で、大悟して無刀流を開く少し前になります。その頃の山岡道場は田舎から修行に来る先生で三月といない激しい修行ぶりで、高野も屈強な先輩方に相当しごかれた様です。後に本人も「これは山岡道場一流のものであった」と述懐しています。

二カ月も修行していると、普通ではない高野の頑張りに詮索する者もいましたが本人はとぼけていました。ある日鉄舟に昼食に誘われた際、二人きりになった所で「もう誰もおらぬ。一部始終を話してみよ、次第によっては力添えをする。」という優しい言葉に高野は涙をこぼしながら一切の経緯と雪辱せねば郷里に帰らぬという決意を告白したのでした。すると鉄舟は「その岡田とやらはもはや君の敵ではあるまい。早速行って来い。」と送り出したのでした。岡田の道場に行くと、彼は先般の不調法を詫び、後悔している事を告げ、許しを乞うて来るのでした。尚も試合を求める高野でしたが「あなたには到底及ばない」と断り続ける岡田に高野も気を削がれ、諦めて東京に戻り鉄舟に報告したところ「いや、それは当然だ。やれば岡田は生命はなかったろう」といわれ、「まあそんなに腹を立てるな。もういいだろう」と宥められたという事です。高野が鉄舟道場で修行をしたのは三カ月という事ですが、大きな影響を与えたのでした。以下次号（一峰　義紹）